●表紙イラスト
葉 祥明

表紙のことば

「故郷への便り」とでも言うべき「風」の表紙絵の仕事もこれが最終号。私の大好きな故郷の野に遊ぶ、母と子の絵です。……つまりは、こういうことです。故郷、愛、幸せ、平和、希望、祈り…こういったものの究極のイメージが、これでした。私達全ての源である自然、そしてその人間的象徴である「母と子」が安心して生きてゆける世の中であることを祈りつつ、切に皆様とお別れをしたいと思います。さようなら!

●シーン'90撮影のことば
長野良市
三角港フェリーターミナル(三角町)

対岸の戸馳島から三角港を望みました。アートポリスプロジェクトに参加している建物。白い巻貝型のターミナルが、驚くほど周りの風景に溶けこんでいました。

編集後記

■取材で初めて入った球泉洞。ちょっとばっかり考えが甘かった。足は滑らせる、頭はぶつける、最初に渡されたヘルメットがこんなに役に立つとは思わなかった。カメラを落とさないようにするだけで必死。しかし理屈抜きにおもしろい。体験コースに入ったうちで、最年長は70才代、最年少は1才半のお子さんだったそう。いやー……。

■葉祥明さんのメルヘンチックな表紙絵を1年間お楽しみいただきました。「阿蘇を越えて遠くへ行ってみたい」という未知の世界への憧れ……。これが葉さんの根底にある心象風景とおっしゃっています。私達も新たな年度への憧れと期待を抱きつつ頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

※前号「HISTORY OF 熊本人」21ページの写真の説明「ドイツ医学博士号証書」は「帝国ドイツ学会特別会員証書」の誤りでした。お詫びして訂正します。

"くまもとの風"愛読者募集

本誌の年間購読を希望される方は、1年分の郵送料1,500円(250円×6回)分の切手を同封のうえ、下記へお申し込み下さい。
(随時受付けます。)
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号
熊本県広報課「くまもとの風」係
☎096-382-9780

CONTENTS

1-2 風のコンパス ―地域のふれあいの中で生きる―
3-6 特集 ―地域福祉―
7-8 ぴ～ぷる ～尾上公敏さん～
9-10 ステップ・アップKUMAMOTO ～葉祥明表紙コレクション～
11-12 ふるさと紀行 ～球磨村～
13-14 シーン'90
15-16 ママさんレポート ～田原坂～
17-18 30minutesトーキング ～風間杜夫さん～
19-20 ウォッチング元気図鑑 ～熊鹿VS東京VS大阪～
21-22 HISTORY OF 熊本人 ～松田喜一～
23-24 INFORMATION
25-26 街角便り他

WORLD★REPORT

姜信子の韓国通信

아저씨、좋아해요

現存する韓国唯一の百済時代の石塔(忠清南道・扶餘郡)

おじさん、好きです

忠清南道は、熊本県とは何かと歴史的因縁の深い地だ。豊臣秀吉の二度にわたる朝鮮侵略の主たる武将のひとりが加藤清正なら、それを迎え撃った朝鮮の英雄は李舜臣将軍であり、そのお墓がここ忠清南道にある。さらに、菊水町の江田船山古墳と公州市にある武寧王陵。これらは年代的には六世紀半ばのもので、当時の中国の南朝の影響を受けたその出土品は、お互いに非常によく似ている。その武寧王の時代には栄えていた百済が滅びるのが、六百六十年。忠清南道の扶餘の地でである。

扶餘は忠清南道の観光の要所である。この地を訪れる日本人は多い。土産物屋のおばさん達が、通りがかりの観光客に少しでも日本人らしき雰囲気を感じると「みやげものあるよ」と、日本語で連呼するほどだ。

ここをひとりの日本人男性が訪れた。

彼はまず、柔らかな微笑をたたえた百済特有の仏像や、当時の仏教寺院建築に使われた瓦など、百済の遺物が収蔵されている博物館を見、その裏手にある扶蘇山に登った。扶蘇山はその一帯全てが百済の王宮だった赤松生い茂る低い丘だ。百済滅亡時には三千人の宮女が身を投げたという落花岩もある。そこには、日本からの修学旅行生達も来ていた。

その一団を横目に見つつ、ひとり行く彼と、何度かすれ違った韓国の女子高校生達がなんとなく会話を交わすようになった。といっても、彼の韓国語はまだ挨拶レベルに少し毛が生えた程度だから、そんなに深く話せるわけでもない。が、言葉で足りない分は笑顔でカバーである。「扶餘には日本人は沢山来るけど、実際に話したのはアジョシ(おじさん)が初めてです」女子高生達はそう言った。日本からの修学旅行生達の話題から日本についての話に及んだ時、日本に対する印象を問われた彼女達は、「率直に言って、いい感情は持っていません。」と、少し間を置いて答えた。そのうちの一人が、「教科書で習う日本は印象が悪いけれど、本当のところはよくわかりません」と、後で付け足した。

日本の学生生活について話したり、彼女達から勉強と男女交際の両立について意見を求められたりしながら、話は続いた。彼は時には真面目に、時には下手な冗談を飛ばし、時には韓国人の誰にも聞き取れない訳のわからない韓国語を口走り、女子高生達の写真を撮り、互いに住所を教え合って別れた。そして後日、写真を送ったのである。

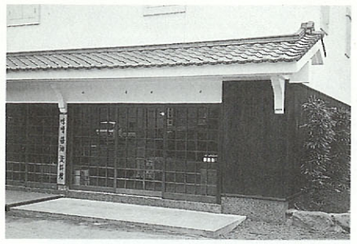
公州郡武寧王陵

韓国の女子高生(百済文化祭にて)

女子高生達から寄せ書きの形で御礼の手紙が来た。木彫りの人形のプレゼント付きだった。「アジョシと会って、日本人に対する見方も少し変わりました。また扶餘に来る時には連絡をください。私達はアジョシが好きです。」そう書かれていた。

姜信子さん
フリーライター。ノンフィクション「ごく普通の在日韓国人」で朝日ジャーナル賞受賞。
熊本と韓国の交流推進のため、韓国・忠清南道庁に県職員として初めて派遣された夫とともに昨年5月下旬に渡韓。

HOT LINE 街角便り



「味噌醤油資料館を訪ねて」
本田隆子(61才/菊陽町)

白壁に冬日去るまで人待てり　隆子

此の句に目を止めて戴いたお方からお誘いを受けて、味噌醤油資料館をお訪ね致しました。豊肥線三里木駅から北に一キロ程。竹林を背に土蔵作りの資料館は、白と緑のコントラストが美しい静かな佇いで御座居ました。創業地新町の建物をそっくり移されたとの事で、二階が展示室となっており、今昔コーナー・歴史コーナーなど素人の私にも良くわかる構成で大変勉強になりました。公民館学習や学校の教材など大いに利用出来るのではないでしょうか……一階に降り緋毛氈を敷いた床机でお茶の接待を受け裏庭の植込みや流れに目をやっておりますと、タイムトンネルを通って遠い昔に還った様な安らぎを覚えました。ひとひらの白梅が散る下を清々しい気持ちでお暇を致しました。

「たくま歳時記」
西生 了(59才/熊本市・小学校校長)

"山路来て何やらゆかしすみれ草。　芭蕉

いよいよ春が来たという感じ。このたくまの野にも草木の眠りも醒めて根が動き始め、芽もふくらんできました。

学校の周りにもスミレ・タンポポ・レンゲソウ・ナズナなどが咲き出しました。木は椿が美しい。児童栽培委員と職員で育てた菊などの根分け、接木、挿木などがはじまりました。野路にはつばなが穂を出し、麦畑にはひばりがさえずり、こじゅけいが特有な鳴き声を聞かせ、時には校庭にも訪れています。学校は愛鳥の里でもあります。止まる木々には万葉集の詩の標札も下げられ情緒豊かな環境を醸し出しています。

地域では、「ふれあいの町、あいさつの町、花の町」をキャッチフレーズに美しい町を創造し、感性を育てる豊かな町づくりが進められています。

「文化を絡めた活動を―コスタリカより―」
門松幸則(?才/コスタリカ・青年海外協力隊)

12月号の風のコンパス"文化が人を魅きつける。"の「これからは産業をベースにした地域づくりというよりも、文化というものによって人を魅きつけるような地域づくりということの方が、よほど地域にとっては重要な戦略なんであろう…」という点を痛感しました。青年海外協力隊としてコスタリカに派遣され、協力活動をすすめるなかで日本文化が絡む活動は、2、3成果が見られつつあります。そのひとつが、コンピューターによる日本語教育システムの技術導入と開発、パソコン通信による子どもたちの文通です。

3年間活動を進めてきて感じるのは、その戦略のひとつに文化的な側面を加えることがあげられる、ということです。そしてそれが結果的には、技術協力の枠を越えた、息の長いつきあい(国際交流)ができるような気がします。

「二年間の協力活動を終えて」
丸山 健(?才/パラグアイ・体育・協力隊OB)

私は、二年間の協力活動の中で、たくさんのパラグアイ人の子供たちと接してきました。その中で、子供たちの泣く・笑う・怒るといった自己表現の豊かさにびっくりさせられました。子供たちの屈託のない表情がとても新鮮な印象として私の心の中に残っています。その豊かな表情を大人になっても持ち続けているパラグアイ人をとてもすばらしく感じました。私にとって、そんなパラグアイ人の表情の中に、日本人の忘れかけた真の心の豊かさ、あるいは生活の豊かさを感じさせられた二年間でした。パラグアイよ、ありがとう!

お便り募集!

みなさんの身近な情報(出来事・季節の変化・風景・感想など)を200～400字程度にまとめてお送りください。
(採用された方には"風テレホンカード"をプレゼント)

●あて先
〒862 熊本市水前寺6丁目18-1
熊本県広報課「くまもとの風」係
☎(096)382-9780

たくさんのお便りをお待ちしています。